

# 四季彩便り

2011・初冬

発行人 人光堂  
サニエ光堂  
漢方四季彩堂  
酒見裕子  
(092)927-2693

## 冬に向けて

燃えるようなモミジの深い赤色、まばゆいばかりのイチョウの黄金色、目にしみるハゼの鮮朱色：木々は競うかのように色とりどりに装い、初冬の冷たい風は時折、彼らを翻弄しています。

植物たちも冬支度を始めたようですね。

中国医学では、冬は腎精(生命力・エネルギー)を蓄える季節と考えています。

開放的な夏とは対照的に、活動を控え、閉じて守る季節なのです。

野生動物たちは、冬に備えて食糧をしっかりと蓄え、羽や体毛も生え変わり、来る冬をじっと耐えて過ごすでしょう。



私たち人間も自然界の影響を受けています。

冬は寒気に体温を奪われないように体表の毛穴や粘膜のキメを閉じて守ります。

大気の冷えや乾燥が増す時季、風邪や肺炎など、呼吸器系の病に注意しましょう。

朝まだき嵐の山の寒ければ

紅葉の錦着ぬ人ぞなき

拾遺集・藤原公任



## 四季の話題

### 枯葉アート

ある日の夜更け、ふとテレビに目をやると、新潟県の農村に住む一人の主婦が紹介されていました。

多田キヨさんというその人は、海外でも高い評価を受けている枯葉アーティストなのだそうです。

飾り気のない人柄、素敵な笑顔、明るい性格、すっかり魅了されて見入りました。「材料はタダ」といって、その作品たるや見事の一語に尽きます。

葉脈だけになったイタドリイタドリの葉の上に、白樺の皮で作った観音様の像。

タイトル『日本の夜明け』という作品は、タマネギの皮で太陽を表現。

誰も目に留めない枯葉や砂や灰など、そこらに落ちているものが絵の具になるというのです。

ネギの皮が桜の花に、滝に、大変身。

クモの糸を束ねて「山」「絆」という文字を作ったり…。

捨てていたものに命を吹き込み、鮮やかに蘇らせるその感性と技に敬服するとともに、「何ひとつ捨てるものがない」という、私たちが本来持ち合わせていたはずの「もったいない」精神をも蘇らせてくれました。

## 折々の薬草

サンシユユ (生薬名 山茱萸)

中国・朝鮮原産のミズキ科の落葉高木です。

日本には江戸時代中期に薬木として、小石川養生所、つまり現在の東京大学附属小石川植物園に導入されたのだとか。

春まだ浅い三月初旬ごろ、葉に先立って鮮やかな黄色の集合花を枝いっぱい咲かせた様子は、それは見事です。



植物学者・牧野富太郎博士はこの花に春黄金花こがねはなという別名をつけました。

秋にはグミグミに似た楕円形の真っ赤な果実が、目を惹かせてくれます。

この果実のようすから、秋珊瑚あきせいらいという呼び名もあります。

鳥栖とりの中富記念くすり博物館の方に厚くましくお願いして、薬木薬草園にある山茱萸の実をほんの少し頂き、口に入れてみると、酸味と強い渋味がありました。

薬用には果実の中の種子を取り除き、果肉を乾燥させて用います。

精気不足、目まい、耳鳴り、頻尿などの症状に効果のある、杞菊地黄丸こきくじおうがん、八味地黄丸はちみじおうがん、牛膝腎気丸ごしやじんきがんといった漢方処方に配合されています。

滋養強壯の目的で薬用酒としても利用されます。

